

原の城遺跡

1996年3月

飯田市教育委員会

序

飯田市は自然条件に恵まれ、古来より交通の要衝に位置しており、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を今に残しています。これら文化財は、先人がこの地に暮らしてきた痕跡であり、私たちの暮らしの糧となるものです。従って、これらを後世にそのまま残すことが私たちの責務であるといえます。しかしながら、昨今の開発の波は例に漏れず当市にも及び、市街地周辺部において道路の改良や圃場整備、住宅・店舗の建設が盛んに行われ、今まで残されてきた貴重な埋蔵文化財が消滅しつつあります。

私たちは文化財の保護という責任を負うと同時に、より良い社会や生活を求める権利を有しています。ですから、日常生活の中で、文化財保護と開発という相いれない事態に直面することが多くありますが、このような場合、発掘調査を行い記録保存を図ることもやむを得ないものといえましょう。

上郷地区は飯田の市街地に近いことから、宅地化が進み、道路整備が進められてきています。今回も諸般の事情から当地区に警察の官舎を建設するということになり、当該地の埋蔵文化財への影響も少なくないということで、次善の策として、発掘調査をおこない記録保存を図ることとなりました。

調査結果は本書のとおりですが、当遺跡は過去にも数か所発掘調査がおこなわれており、それぞれに成果をあげています。今回の調査結果に限らず、これまでの調査結果を総合的に検討していくなかで、この地域の古代の姿が明らかにされていくものと確信しております。

最後になりましたが、調査実施にあたり文化財保護の本旨に厚いご理解を賜りました長野県土地開発公社ならびに飯田警察署・地元の皆様、また、現地作業。整理作業に従事された作業員の方々に深甚なる謝意を述べる次第であります。

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例　　言

- 1 本報告書は飯田警察署官舎建設に先立ち実施した、飯田市上郷地区所在の埋蔵文化財包蔵地原の城A遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は長野県土地開発公社からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は平成7年度に現地作業・整理作業及び報告書作成を行った。
- 4 発掘調査及び整理作業は一貫して、遺跡名に略号H R N-Aを用いた。
- 5 本調査の住居址番号は昭和63年度（上郷町教育委員会1989）及び平成2年度に行われた同遺跡の発掘調査の実績を踏まえ、5号住居址からとした。また、土坑2は検討の結果欠番とした。
- 6 調査区の設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づき（^側）ジャステックに委託実施した。調査地点の番号はL C75・16-1・9である。
- 7 本書は調査員全体で協議の上、伊藤尚志が編集・執筆し、小林正春が加筆訂正・総括を行った。
- 8 当遺跡で出土した遺物及び記録された図面・写真是、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

本文目次

序	挿図目次
例言	
目次	
I 経過	1
1 調査に至るまでの経過	1
2 調査の経過	1
3 調査組織	1
II 遺跡の環境	3
1 自然環境	3
2 歴史環境	3
III 調査結果	7
基本層序	7
2 堅穴住居址	7
① 5号住居址	7
② 6号住居址	8
③ 7号住居址	10
④ 8号住居址	11
3 土坑	12
IVまとめ	23
抄録	39
	挿図1 原の城A遺跡位置図
	挿図2 調査位置及び周辺遺跡図
	挿図3 基準メッシュ図区画調査位置図
	挿図4 原の城A遺跡基本層序
	挿図5 5号住居址
	挿図6 6号住居址
	挿図7 7号住居址
	挿図8 8号住居址
	挿図9 土坑
	挿図10 原の城A遺跡全体図
	挿図11 周辺ピット図(1)
	挿図12 周辺ピット図(2)
	挿図13 周辺ピット図(3)
	挿図14 周辺ピット図(4)
	挿図15 周辺ピット図(5)
	挿図16 周辺ピット図(6)
	挿図17 周辺ピット図(7)
	挿図18 周辺ピット図(8)

図版目次

遺物図版

第1図 6号住居址出土遺物	26
第2図 6号住居址出土遺物	27
第3図 5・6号住居址出土遺物	28
第4図 6・7号住居址出土遺物	29
第5図 6号住居址・遺構外出土遺物	30

写真図版

図版1 5・6号住居址	32
図版2 7・8号住居址	33
図版3 重機表土剥ぎ作業・作業風景	34
図版4 基準点測量作業・調査区全景	35
図版5 5・6号住居址出土遺物	36
図版6 6・7号住居址・遺構外出土遺物	37

I 経過

1. 調査に至るまでの経過

平成6年、飯田警察署長 中島安彦より飯田市上郷黒田地区に官舎を建設する旨の通知があった。建設予定地は埋蔵文化財包蔵地原の城A遺跡の範囲内であり、過去の隣接する道路建設に先立つ発掘調査では弥生時代の住居址等が確認されている。このため、平成6年11月30日に、長野県教育委員会文化課、飯田警察署、飯田市教育委員会の三者で保護協議を実施した。その結果、事前に試掘調査を行い、遺構・遺物が確認された場合は再度協議を行うことになった。

この協議に基づいて平成7年2月13日から2月23日にかけて試掘調査を行ったところ、弥生時代の住居址ほか数基の土坑が確認されたため、再度協議を行った。再協議の結果、建物部分及び造成時に地表を削る部分について飯田市教育委員会で発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。その後、平成7年4月3日に飯田市教育委員会と官舎の建設を担当する長野県土地開発公社の間で、委受託契約を締結し、平成7年4月6日から発掘調査を実施することになった。

2. 調査の経過

委受託契約により、平成7年4月6日から発掘調査に着手した。まず、重機により表土剥ぎを行い、機ジャッステック委託による基準杭設定を行った。そして、作業員の人力により住居址・土坑等遺構の検出作業を行った。遺構の掘り下げ作業は必要に応じて図面を取りながら進められ、その後個別の写真撮影を行った。最後に空中写真撮影・測量を実施し、現地での作業を終了した。

現地調査の終了後、飯田市考古資料館において図面・写真類の整理作業、出土遺物の水洗い・注記・接合・復元・実測・写真撮影を実施し、報告書の作成にあたった。

3. 調査組織

(1) 調査団

調査担当者 伊藤尚志

調査員 山下誠一 吉川 豊 馬場保之 吉川金利 下平博行
福沢好晃 佐々木嘉和

作業員 新井幸子(さちこ)・新井幸子(ゆきこ)・伊坪 節・伊藤博紀・伊東裕子・
井上恵司・今村春一・太田沢男・岡田直人・岡田紀子・奥村栄子・川上一子・
北原久美子・北原 裕・櫛原勝子・久保田定男・熊谷義章・小池金太郎・

柳原政夫・佐々木美千枝・代田和人・鈴木尊子・鈴木道也・瀬古郁保・竹本常子・
田中 薫・中村 信・鳴海紀彦・西山あい子・林 政人・原田四郎八・樋本宣子・
古林登志子・古根素子・星本初子・牧内八代・正木実重子・松沢美和子・
松下節子・南井規子・松下友彦・松島 保・森藤美知子・森本かおり・柳沢謙二・
吉川紀美子・吉川正実・吉沢佐紀子

(2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

横田 穗 (社会教育課長)
小林正春 (" 文化係長)
吉川 豊 (" 文化係)
山下誠一 (" ")
馬場保之 (" ")
吉川金利 (" ")
福沢好晃 (" ")
伊藤尚志 (" ")
下平博行 (" ")
岡田茂子 (" 社会教育係)

II 遺跡の環境

1. 自然環境

原の城A遺跡の所在する飯田市上郷地区は長野県の南端を南北に並走する赤石山脈・木曽山脈の間に広がる飯田盆地のほぼ中央に位置する。北西に野底山・鷹巣山があり、そこを源とする野底川・土曾川が南流し、天竜川と飯田松川に注いでいる。この両河川に挟まれた面積約26kで、東西に細長く緩やかに傾斜した地域である。一帯は天竜川とその支流によって形成された河岸段丘や扇状地上に、往古から現在に至るまで人々の生活舞台が展開している。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を基準として高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷地区の地形の特徴として、中央部を南北に横断する大段丘があり、これを境として俗に上段（うわだん）と呼称される洪積土壌地帯の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、下段（しただん）と呼ばれる沖積土壌面の低位段丘Ⅱが見られ、その段丘崖の高さは約50mを測る。中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は天竜川の現河床面海拔398mとの比高差200～80mを測り、野底山山麓から南東方向に緩やかに傾斜する広大な地域を占めており、野底川による新規扇状地が発達し、総体とすれば乾燥した台地をなしている。中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は三大別でき、南東側に本遺跡のある中位段丘下殿面、北東側に黒田大明神原遺跡の立地する中位段丘八幡原面があり、いずれも細長く小高い丘陵地形を呈している。この間の地域が低位Ⅰ段丘伊久間面で2×1の広い範囲である。

本遺跡は中位段丘下殿面の海拔538～545mにあり、その中でも、原の城台地と呼称される南東側に緩やかに傾斜する長さ700m・幅100～200mの細長く小高い丘陵部の北西部に位置する。南西側は比高差25mの段丘崖となり、北東側は比高差10mでやや緩やかな傾斜を成している。北西側は今村遺跡の立地する台地に連続し、南東側は原の城B遺跡の所在する通称見晴山へと続いている。

2. 歴史環境

昭和57年度に実施された詳細分布調査で、原の城A遺跡では縄文時代中期から中世までの遺物が確認されている。昭和63年・平成2年に行われた発掘調査では縄文土器は出土しているものの遺構は確認されていない。明確に遺構が確認されているものは、弥生時代の住居址が合わせて4軒確認されている。また、隣接する今村遺跡では、昭和62年度に農道の建設に先立ち実施された発掘調査では弥生時代後期の竪穴住居址や方形周溝墓の溝である可能性の高い溝址が検出されている。古墳時代は下段の沖積地帯に中心がみられ、本遺跡周辺ではほとんどその痕跡をうかがうことはできない。奈良・平安時代は遺物が表採されているので集落址がどこかにこされている可能性は高い。

この地には中世になると城が築かれる。詳細は不明であるが、丘陵全体を空堀で区画し本郭・二郭から六郭まであり、『上郷史』によると小笠原長秀旗下の黒田氏が室町時代の応永年間から永享年間まで40～50年この原の城に居たとされている。本遺跡はこの五郭部分に相当する。明治7年になると原の城址内には黒田学校が建設され、明治25年には、同城址内で西に300m程の場所で、今次調査地の近くに上郷西学校として移転されたが、今はその痕跡をほとんどどめていない。



挿図1 原の城A跡跡位置図



擇図2 調査位置及び周辺遺跡図

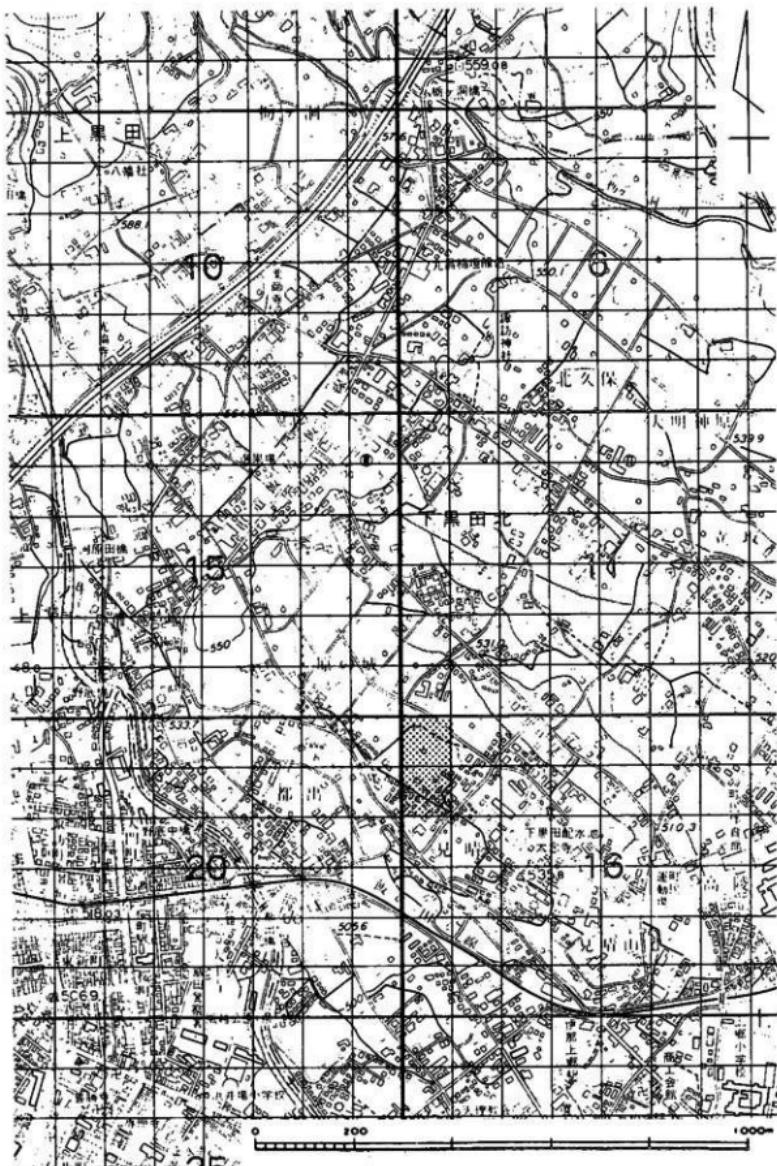


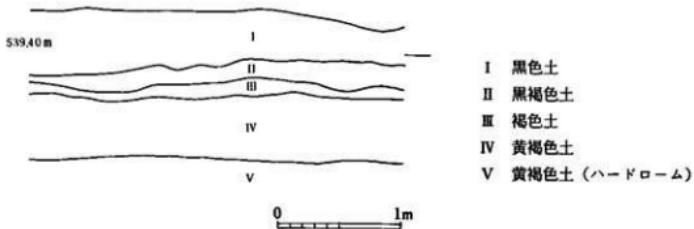
図3 基準メッシュ図区画調査位置

III 調査結果

1 基本層序

遺構の検出面である地山までは調査区西側が深く80cmほどあり、調査区東に向かって段々浅くなる。一番深い東側では50cm程で地山となる。耕土である黒色土は概ね50~40cm程の厚さで調査区全体に広がっており、その下は黒褐色土が10~20cmほどある。さらに10~20cmほどの褐色のローム漸移層があり、黄褐色のローム層と続く。検出面からさらに深掘りをすると40cmほどのところでハードロームとなり、検出面のローム層よりやや純まりのよいローム層がある。調査区の西側と東側では層序に差はないが、東側段丘崖に近付くに従って第2層の黒褐色土・第3層の褐色のローム漸移が薄くなる。

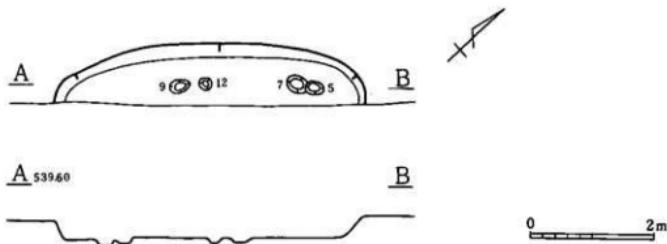
調査区一帯に果樹を植えた時の攪乱が見られたが、遺構の依存状態は比較的良好であった。



挿図4 原の城A遺跡基本層序

2 住居址

5号住居址



挿図5 5号住居址

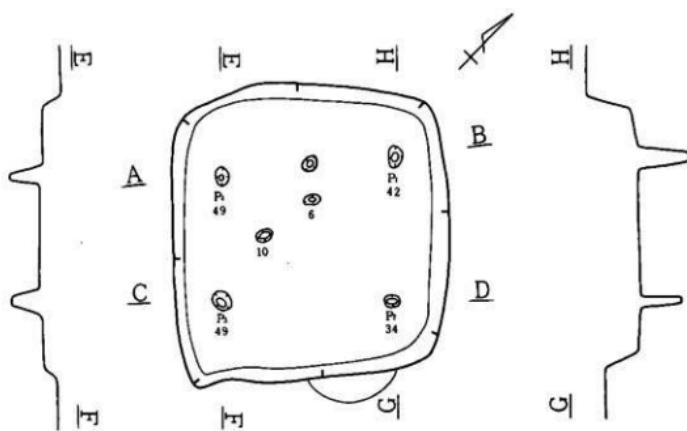
第1表 5号住居址（挿図5）

検出位置	B X 1 4	覆土	暗褐色砂土
切合	切る	なし	床面 全面堅固
	切られる	なし	主柱穴 確認できず
模	プラン	隅丸方形	住居内 貯藏穴 不明
・	規模m	不明	入口 不明
形状	主軸	不明	施設 形状
	壁高cm	30~40cm	炉・窓 規模
	状態	ややなだらか	窓・竪特記事項
出土遺物			
西壁際の床面直上から高坏が出土			
特記事項			
住居址の大部分が調査区外にかかってしまったため、詳細は不明である			
時 期	弥生時代後期前半	根 挿	出土遺物より

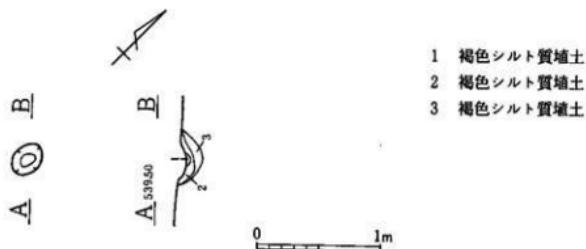
6号住居址

第2表 6号住居址（挿図6）

検出位置	B X 1	覆土	暗褐色砂土
切合	切る	SK 0 7	床面 全面堅固
	切られる	なし	主柱穴 P 1 ~ P 4
模	プラン	隅丸方形	住居内 貯藏穴 なし
・	規模m	4.6×4.4m	入口 なし
形状	主軸	N35° W	施設 形状 地床炉
	壁高cm	40cm	炉・窓 規模 24×24cm
	状態	ややなだらか	窓・竪特記事項 焼土がわずかにあるのみ
出土遺物			
壺1個体・甕10個体 壺の口縁部には簾状紋が施された痕跡が認められる 石器は出土せず			
特記事項			
住居址の入り口付近。炉の入り口側に集中して土器片が出土			
時 期	弥生時代後期前半	根 挿	出土遺物より

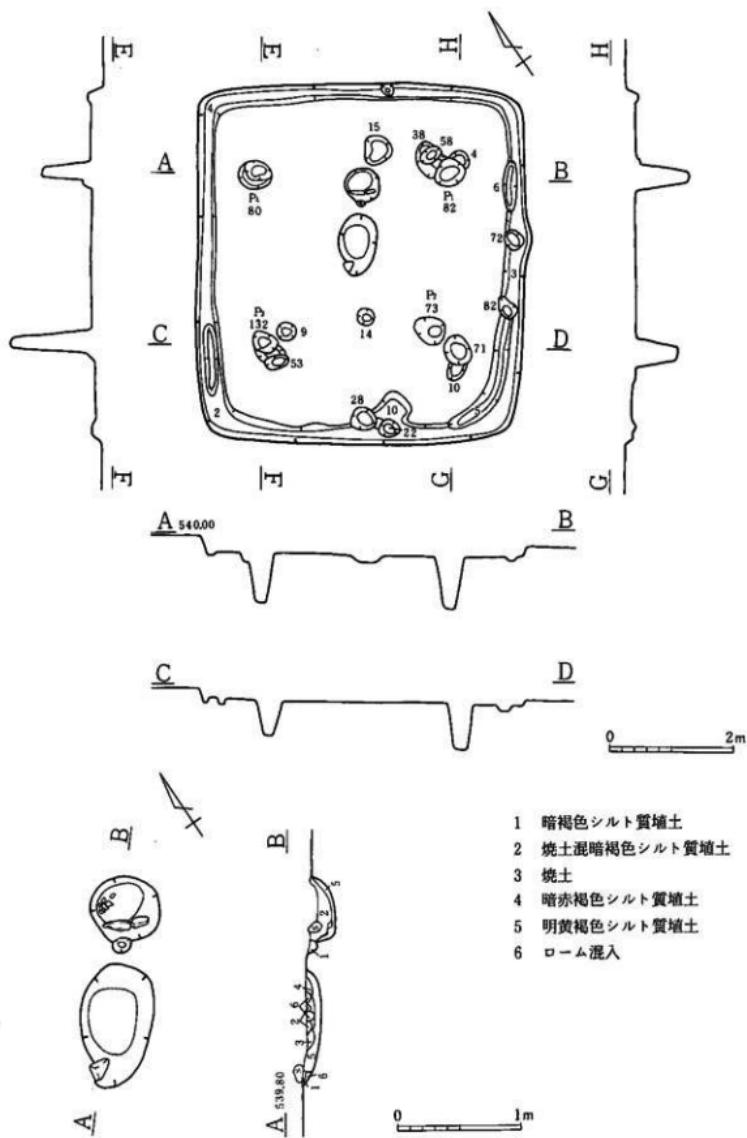


0 2m



插図 6 6号住居址

7号住居址



挿図 7 7号住居址

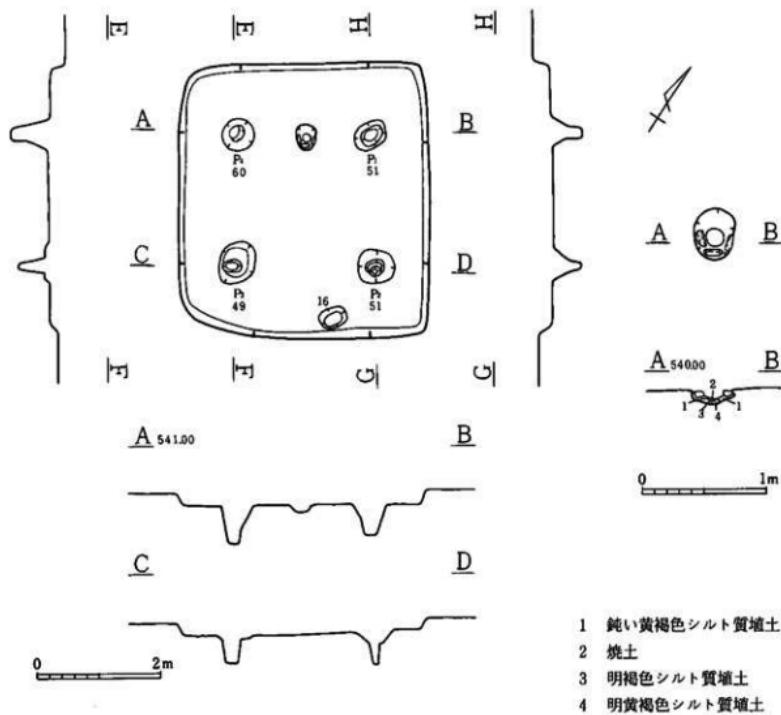
第3表 7号住居址（挿図7）

検出位置	A E 1 1	覆土	暗褐色砂土
切る	なし	床面	全面堅固
切られる	なし	主柱穴	P1～P4 P5・P6（西側2本は共有か）
プラン	隅丸方形	住貯藏穴	なし
規模m	5.6×5.2cm	居室入口	なし
主軸	N37° E	内施設	地床炉・炉縁石を持つ地床炉
壁高cm	16cm		規模 56×56・36×36cm
状態	ややなだらか		特記事項 建て替えが行われたため、炉を2つ確認
出土遺物 磨製石斧（炉縁石として使用） 炉の付近より有肩肩状形石器が出土			
特記事項 主柱穴の並びから住居址を東側に拡張した様子が認められる 炉縁石を持つ地床炉の方が新しい 古い炉は壺の破片を炉縁石代わりに使用			
時期	弥生時代後期	根拠	出土遺物より

8号住居址

第4表 8号住居址

検出位置	A L 4 5	覆土	暗褐色砂土
切る	なし	床面	全面堅固
切られる	なし	主柱穴	P1～P4
プラン	隅丸方形	住貯藏穴	なし
規模m	4.3×4.0cm	居室入口	なし
主軸	N33° W	内施設	地床炉・炉縁石を持つ地床炉
壁高cm	24cm		規模 40×32cm
状態	ややなだらか		特記事項
出土遺物 壺の口縁部・壺の破片			
特記事項			
時期	弥生時代後期	根拠	出土遺物より

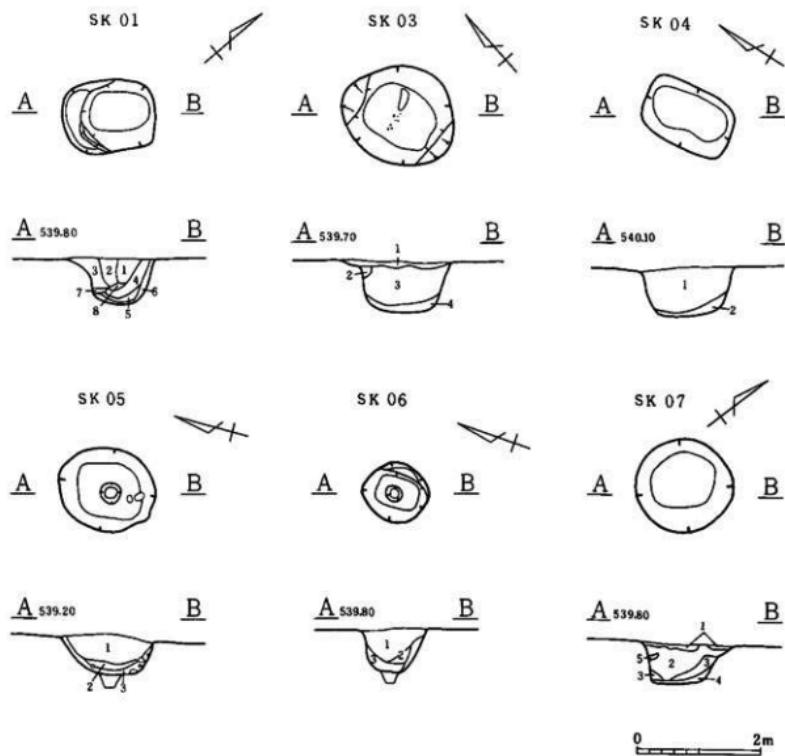


擲図 8 8号住居址

3 土坑

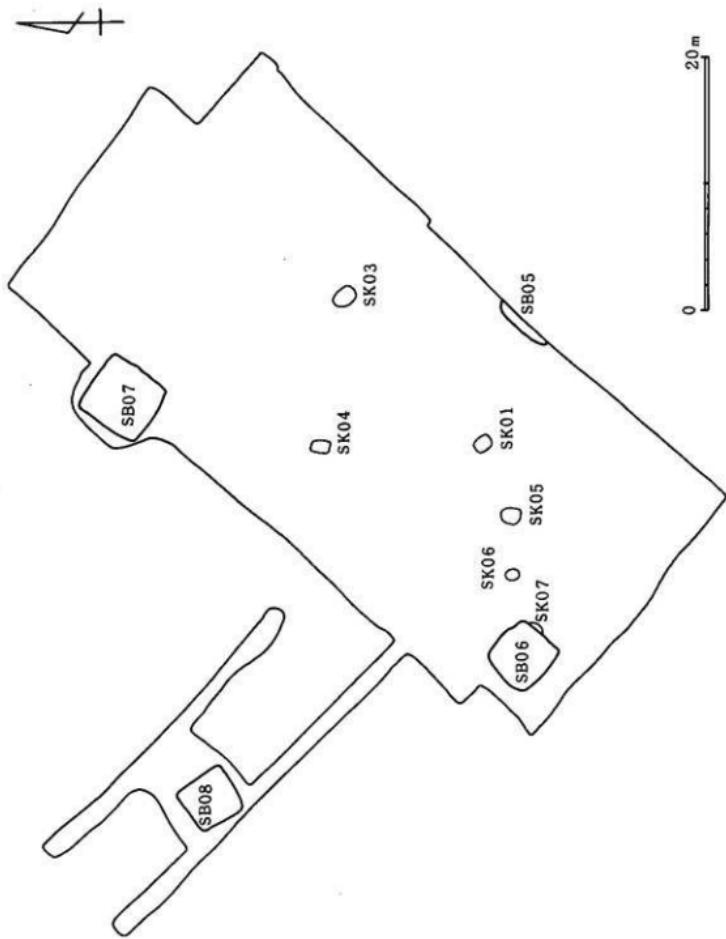
第5表 土坑観察表

土坑No.	擲図No.	規模(長×短×深さ) cm	形 態	埋 土	時 代	備 考
1		148 × 116 × 72	楕円形	複層	縄文	
3		188 × 160 × 80	円 形	複層	縄文	底部に炭化木材あり
4		148 × 96 × 76	隅丸長方形	複層	縄文	
5		160 × 132 × 88	楕円形	複層	縄文	
6		108 × 92 × 88	円 形	複層	縄文	
7		156 × 148 × 64	円 形	複層	縄文	S B07に切られる



- 1 黒褐色シルト質埴土
- 2 暗褐色シルト質埴土
- 3 黒褐色シルト質埴土
- 4 暗褐色シルト質埴土
- 5 黒色シルト質埴土
- 6 褐色シルト質埴土
- 7 褐色シルト質埴土
- 8 黑褐色シルト質埴土

挿図9 土 坑



擇図10 原の城A遺跡全体図

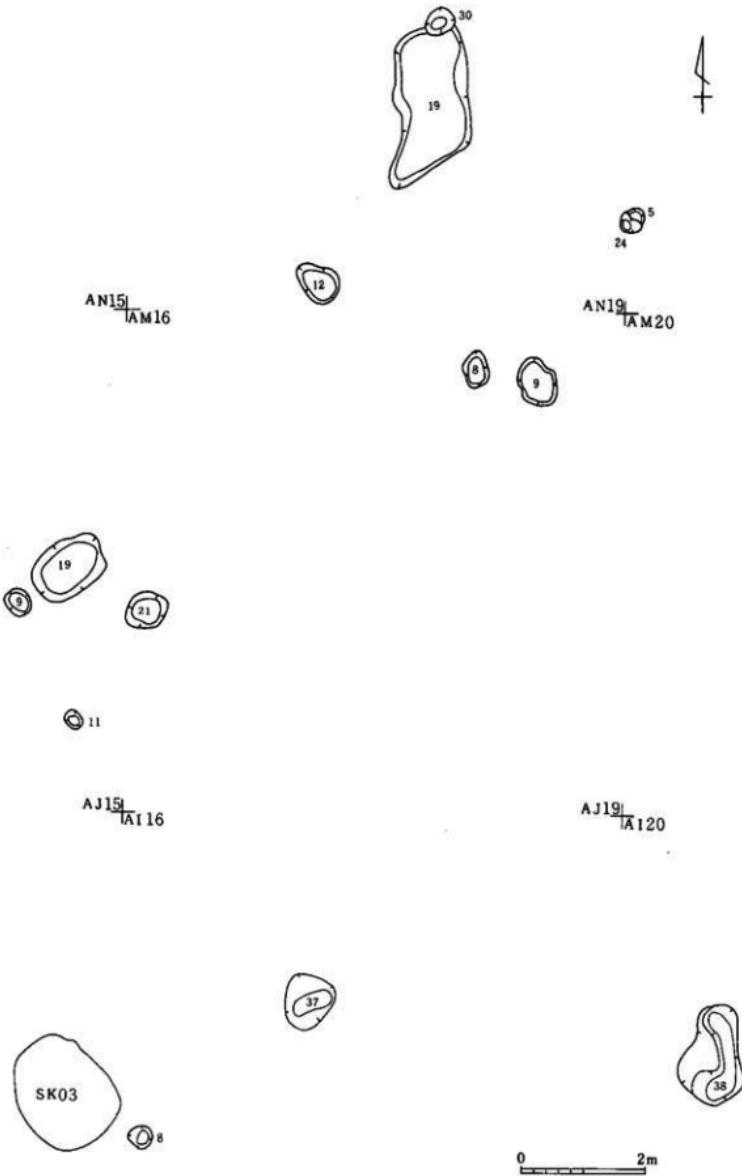


図11 周辺ピット図(1)

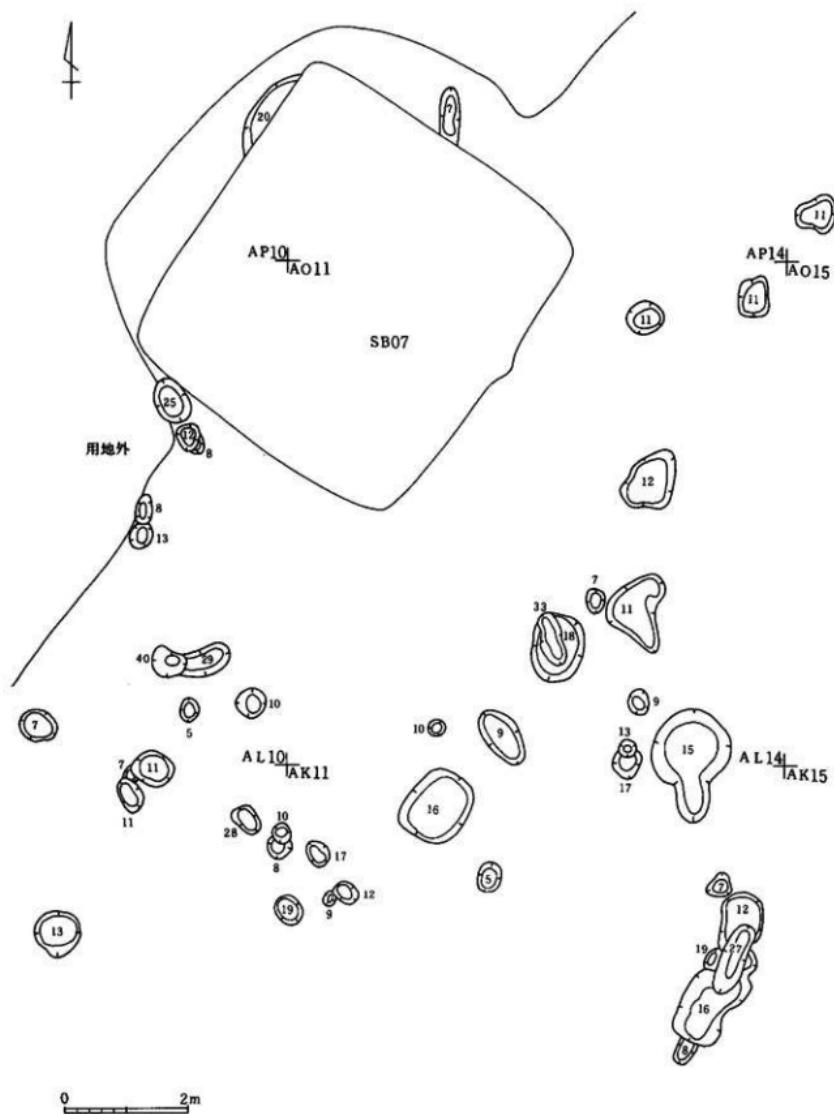
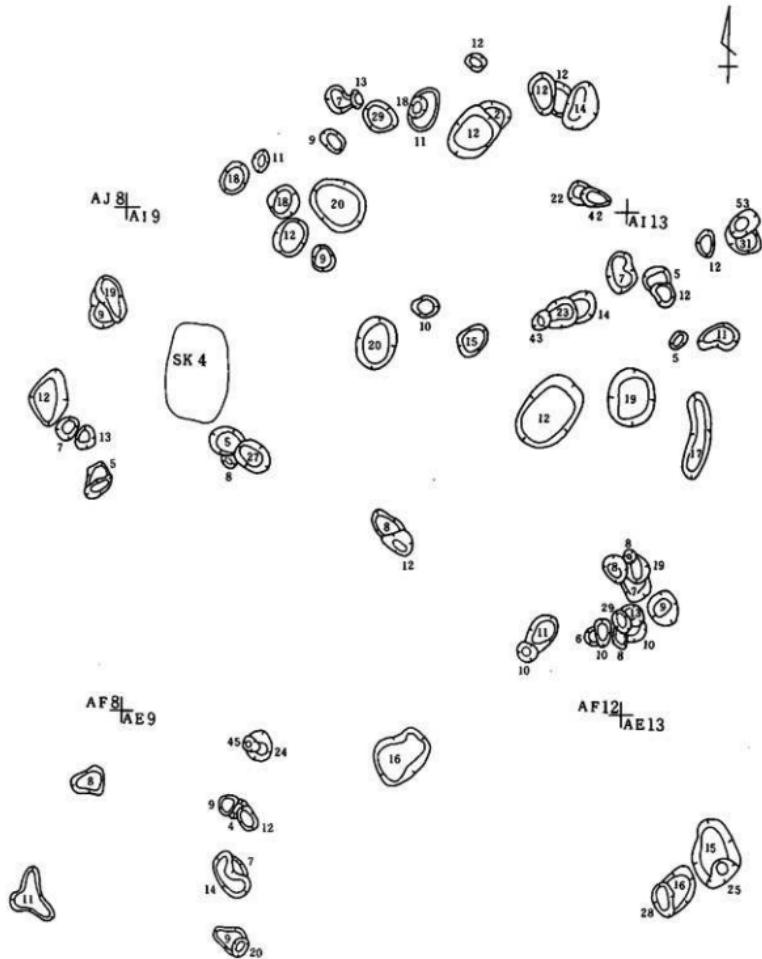
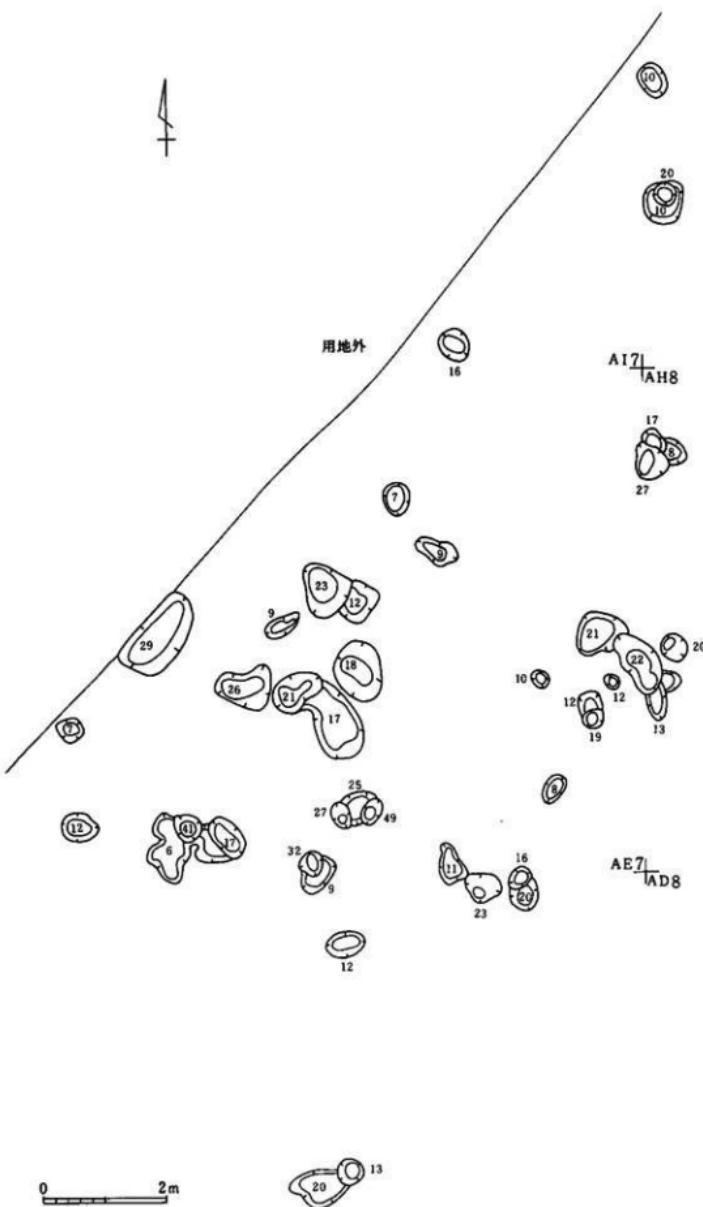


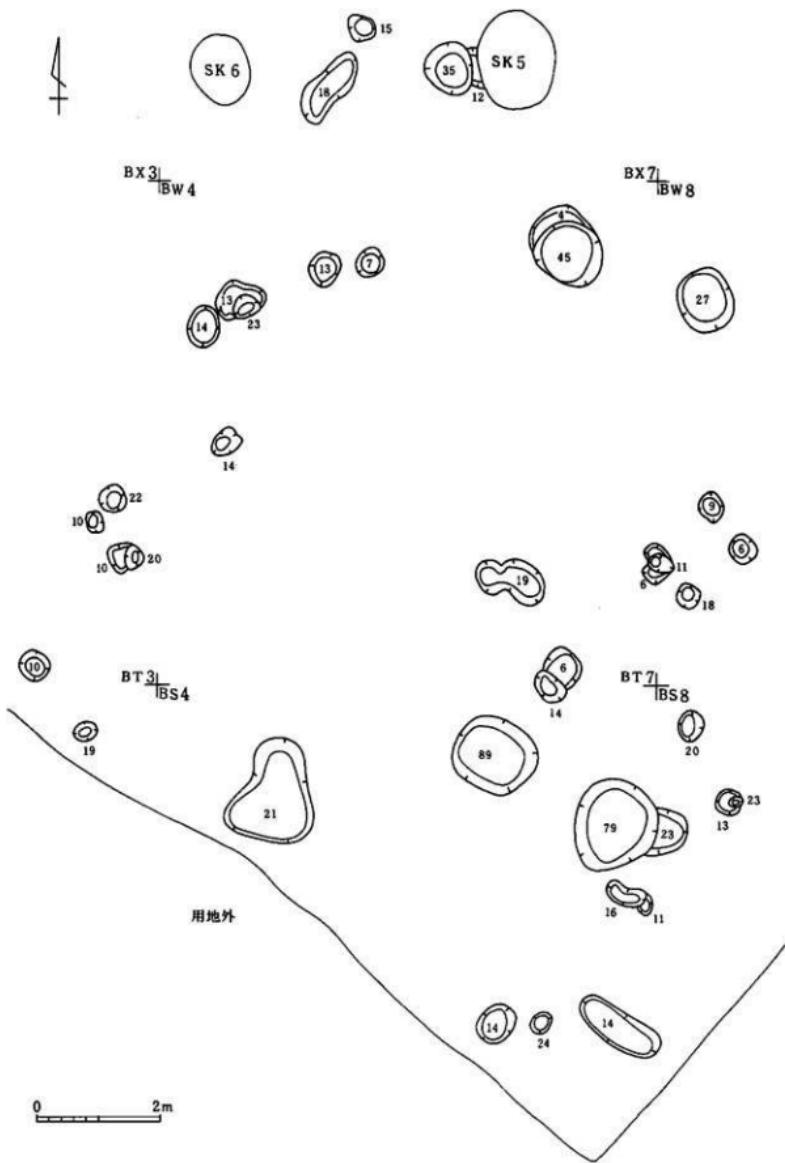
図12 周辺ピット図(2)



挿図13 周辺ピット図(3)



插図14 周辺ビット図(4)



挿図15 周辺ピット図(5)

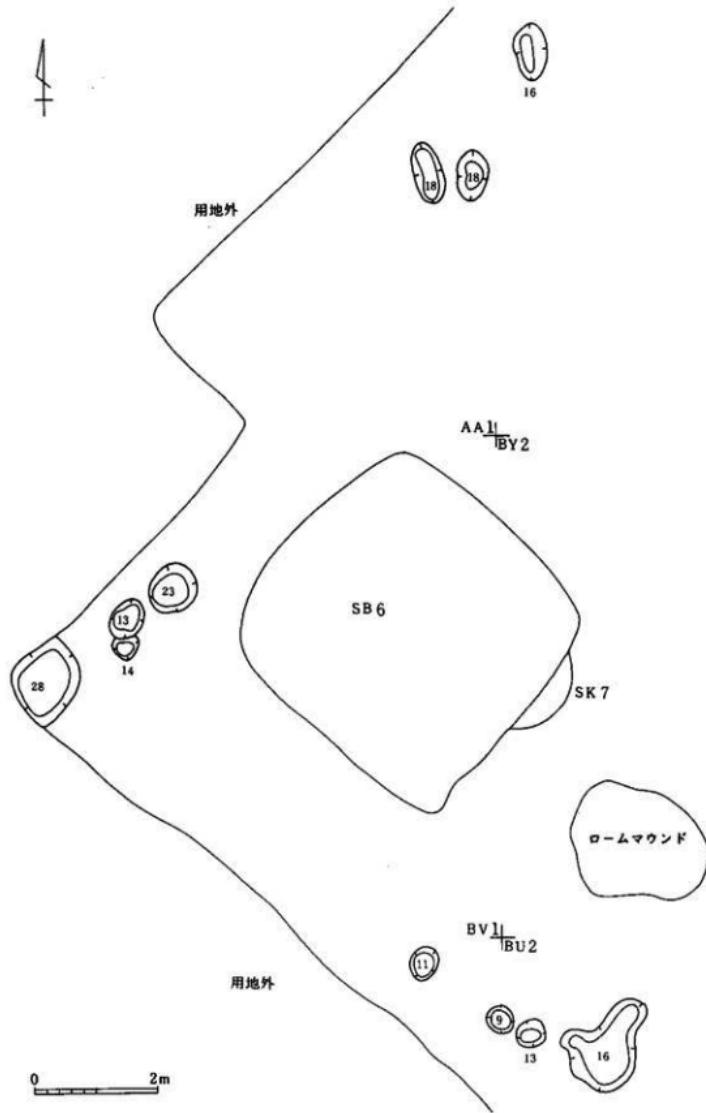
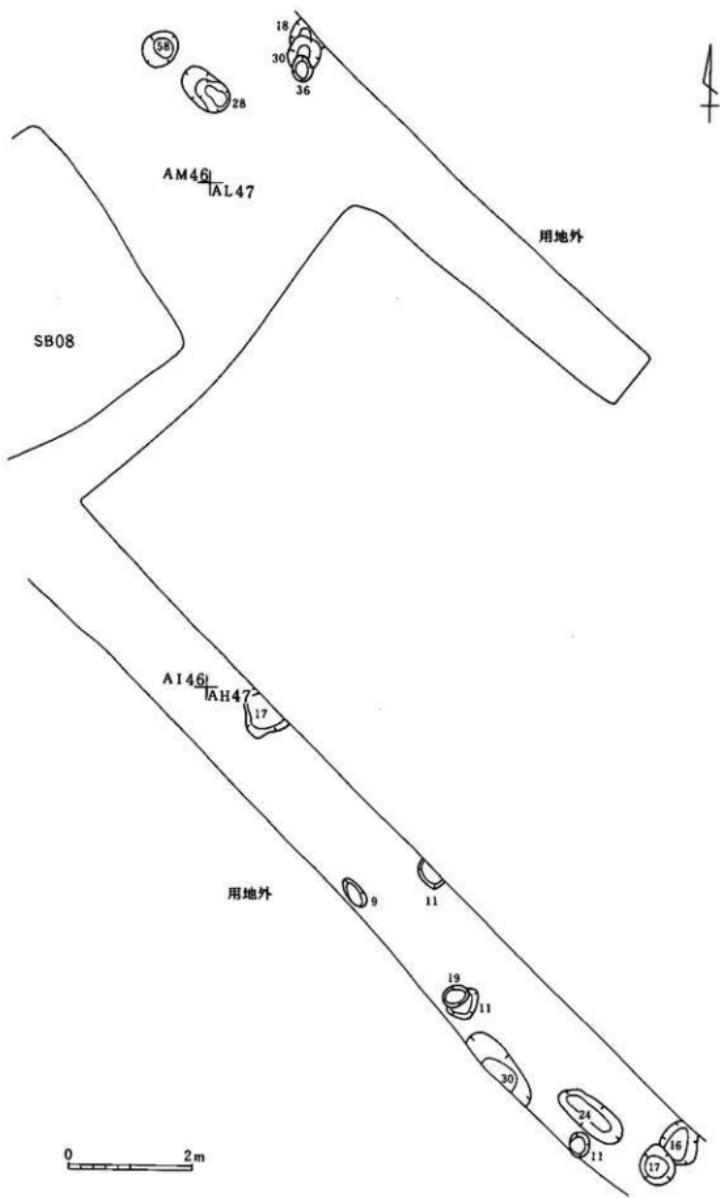


図16 周辺ピット図(6)



插図17 周辺ピット図(7)

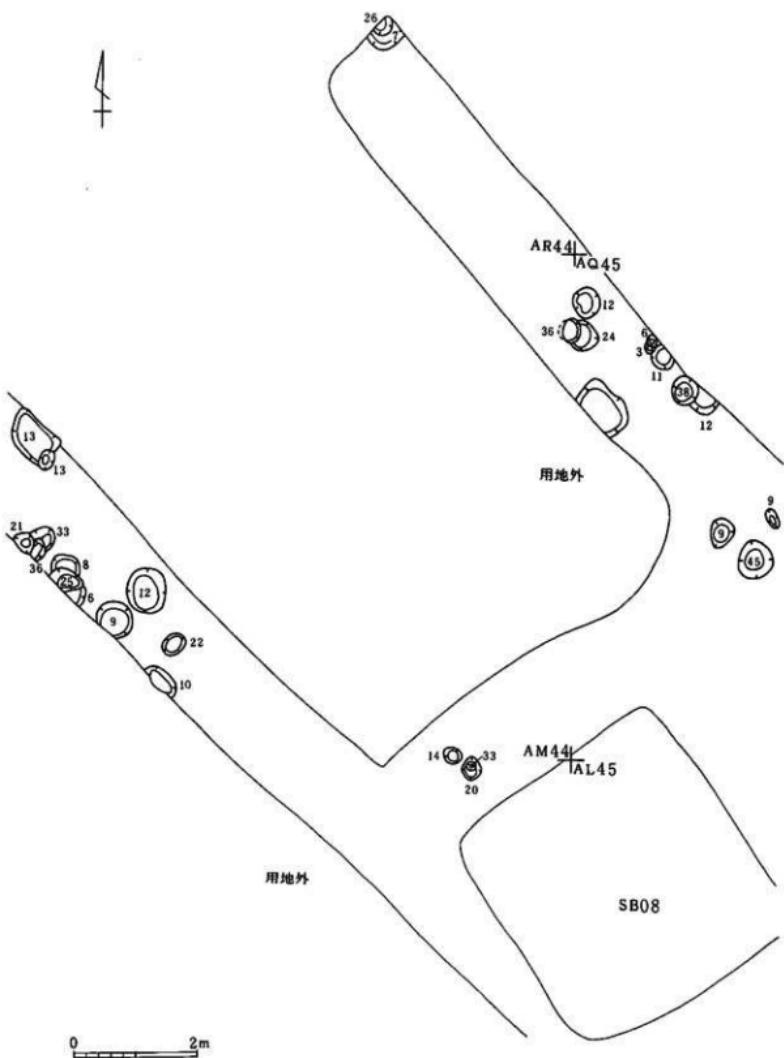


図18 周辺ピット図(8)

VI まとめ

今回の調査の結果はこれまでに述べてきた通りである。今回の調査対象地は原の城遺跡の内でも限られた部分であるので、当遺跡の全容をつかむまでには至らないが、本遺跡の過去2回の調査結果も踏まえ今調査をまとめてみたい。

1. 繩文時代

過去の調査において遺構は確認されていないが、遺物は分布調査の際の表採も含めて何点か確認されている。そのために、付近に集落のあった可能性が指摘されてきたが、今回の調査でも集落を確認することはできなかった。しかし、周りの遺跡の状況を見ると、当遺跡のある原の城台地から続く低位段丘Ⅰ伊久間面にある増田遺跡では繩文時代中期の住居址が17軒確認されている。さらに、東の垣外遺跡のでも繩文時代中期の住居址が12軒確認されており、上郷地区の上段と呼ばれる中位段丘・低位段丘Ⅰには繩文時代の集落が広く営まれていたことは確認されている。

また、今回の調査で、落とし穴を確認することができたことから、当地が繩文時代の生活域の一部であったことは間違いなく、この台地のどこかに集落があったと考えられるが、今後の調査によってこの点は明らかにされるであろう。

2. 弥生時代

今調査の大きな成果とすればやはり、弥生時代の集落の様子を把握できたことであろう。過去の調査でも住居址は確認されているが、いずれもトレンチ調査によってであり、当遺跡の集落の様子をつかむまでには至らなかった。今回の調査で確認された当遺跡における弥生時代の住居址の分布状況は散漫であり、ある一時期に限り営まれた集落であると考えられる。当方は弥生時代後期に爆発的といえるほど集落が増加し、乾燥した洪積土壌の上段地帯にまで集落が拡散するが、後の古墳時代になると衰退する。当遺跡はまさに、この時期に当たるものと考えられる。

当遺跡で出土した土器は飯田市座光寺にある座光寺原遺跡を指標とする土器で、上郷地区低位段丘Ⅰの高松原遺跡で同時期の住居址が38軒確認されており同時期の集落のようすが明らかにされているが、高松原遺跡の立地する台地に比べると、原の城台地は幅の狭い台地であり遺構の分布状況から見ても原の城の集落は比較的小規模にとどまると推測される。

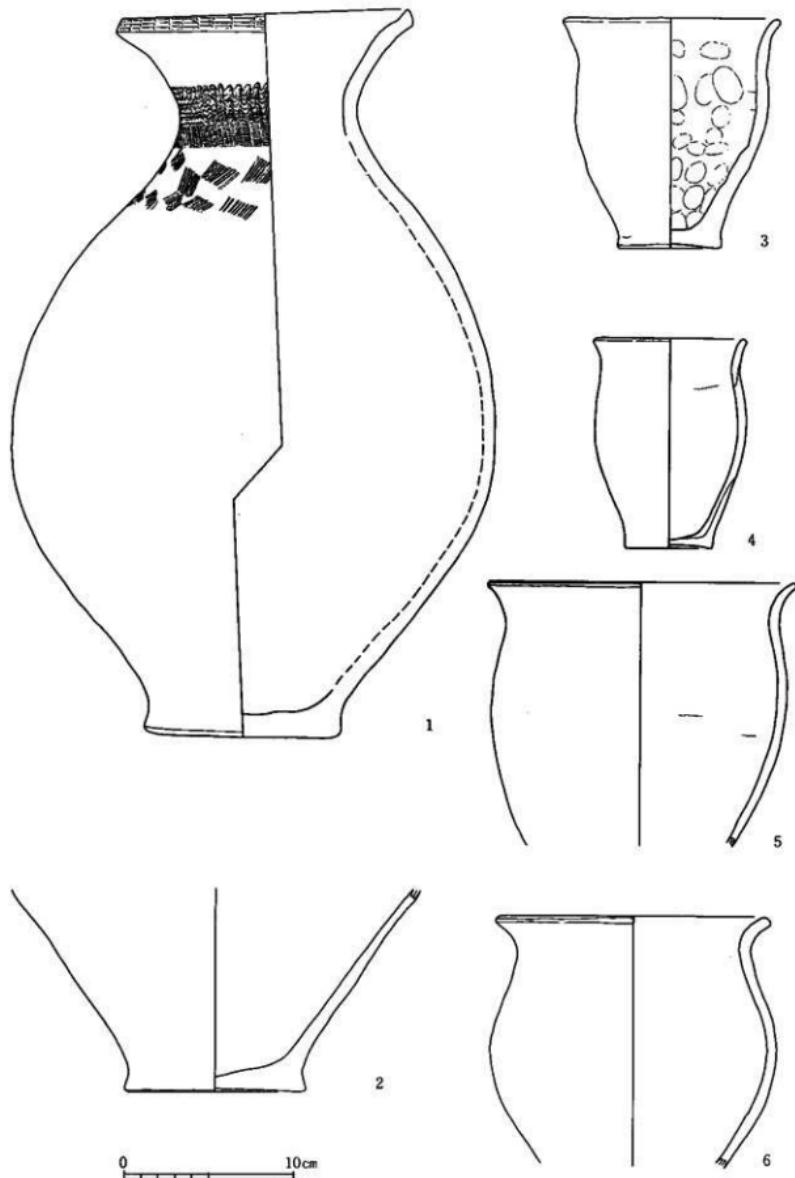
また、当遺跡は中世の原の城址の中に含まれるが、今回の調査ではこの城に関係すると思われる遺構・遺物は確認されなかった。

いずれにしても当遺跡周辺は急速に宅地化が進んでおり、繩文時代より残してきた、人々の生活の痕跡が消えようとしている。今後も何らかの保護措置が必要となってこよう。

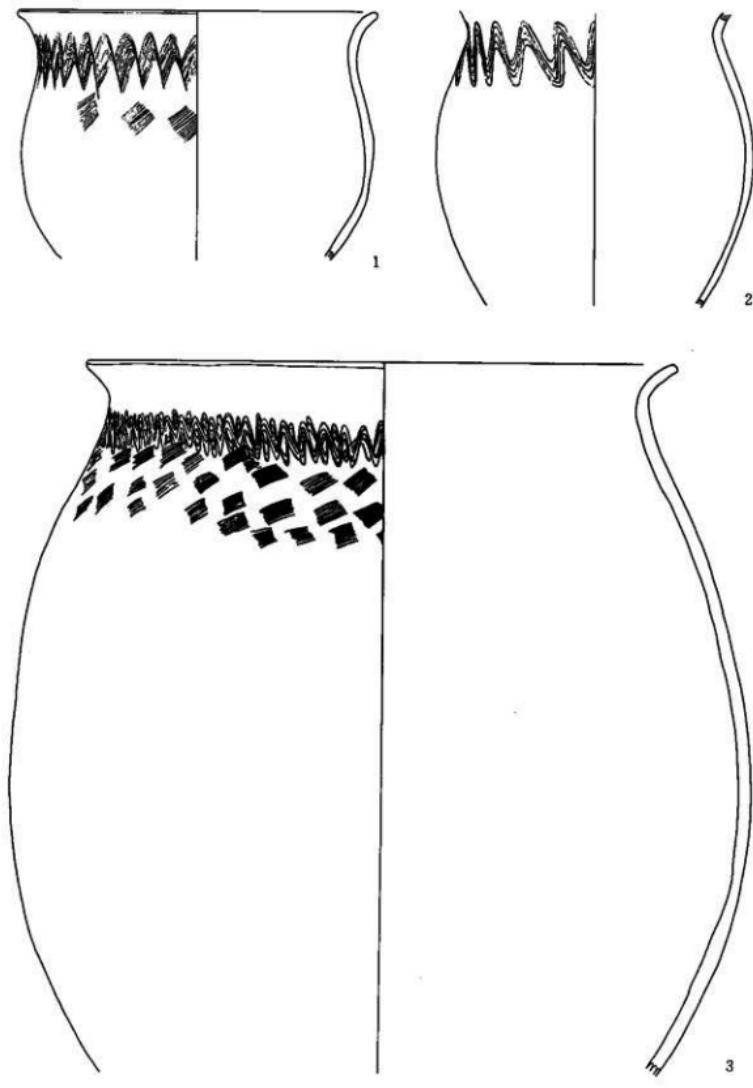
引用参考文献

『原の城A遺跡』	1989	上郷町教育委員会
『高松原』	1984	上郷町教育委員会
『丹保遺跡』	1993	上郷町教育委員会
『ツルサシ遺跡・ミカド遺跡・増田遺跡・垣外遺跡』	1989	上郷町教育委員会
『長野県史』	1988	編長野県史刊行会

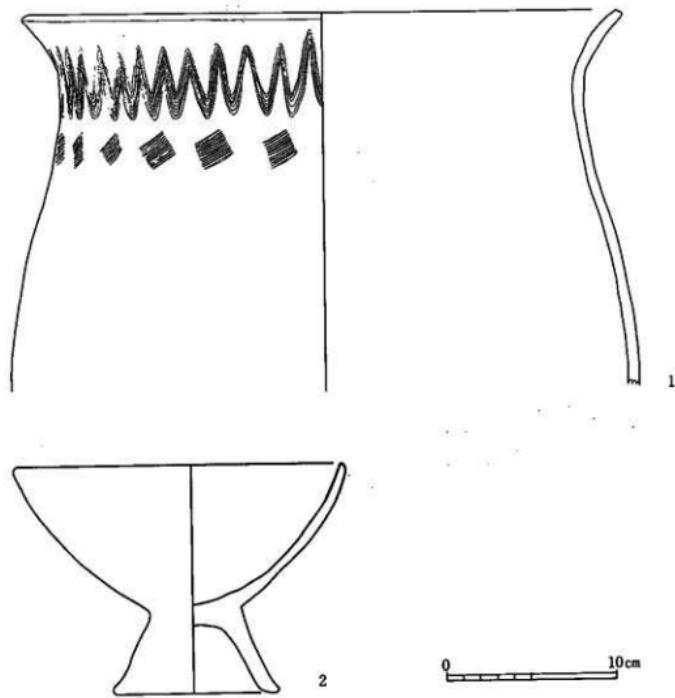
遺 物 図 版



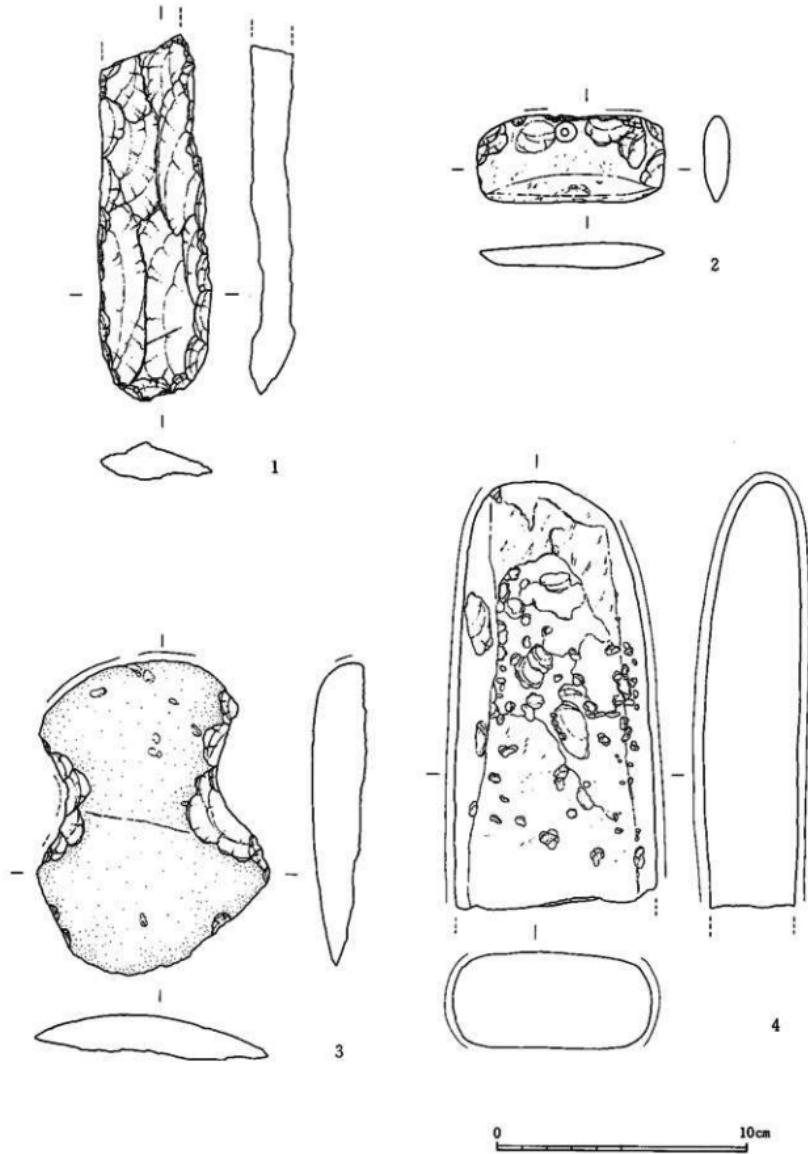
第1圖 6号住居址出土遺物（1～6）



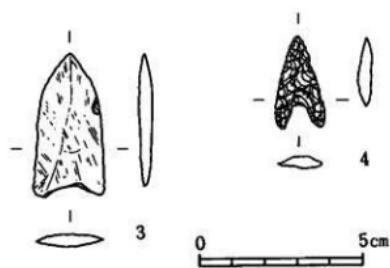
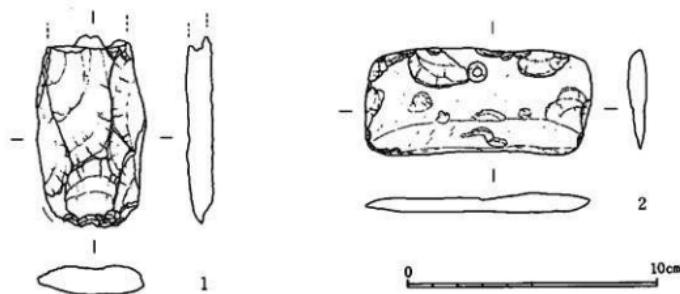
第2図 6号住居址出土遺物（1～3）



第3図 5・6号居住址出土遺物 (1=6住 2=5住)



第4図 6・7号住居址出土遺物 (1・2 = 6住, 3・4 = 7住)

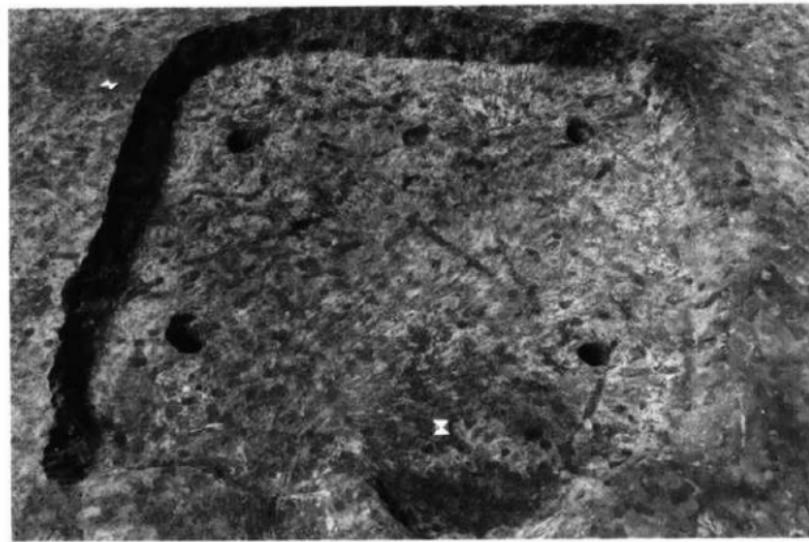


第5図 6号住居址・遺構外出土遺物 (1・2・4=遺構外、3=6住)

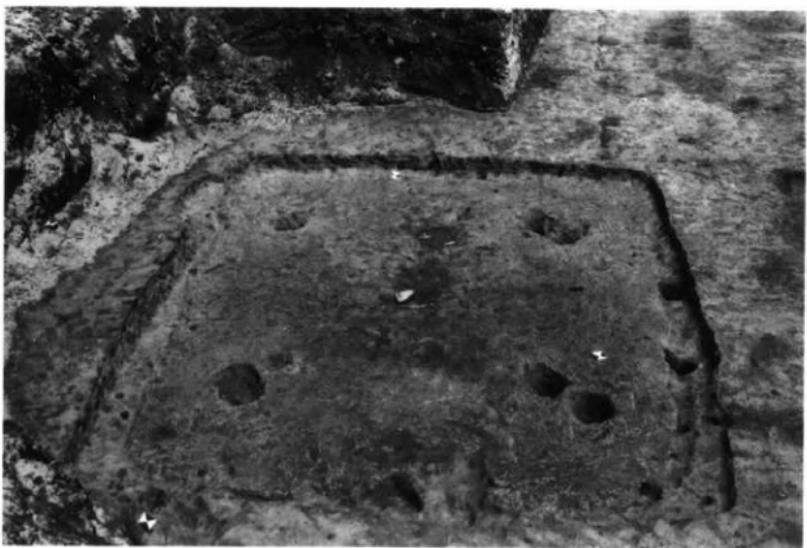
写 真 図 版



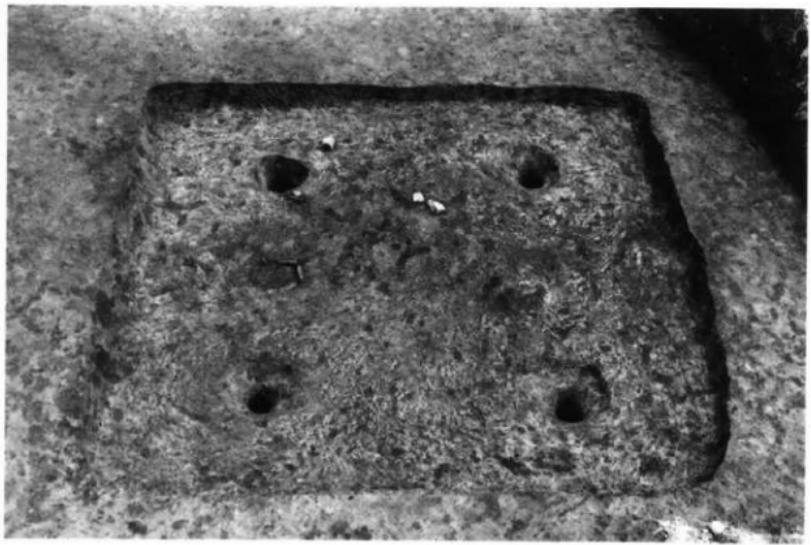
5号住居址



6号住居址



7号住居址



8号住居址



重機表土剥ぎ作業



作業風景



基準点測量作業



調査区全景



6号住居址出土遺物



6号住居址出土遺物



6号住居址出土遺物



6号住居址出土遺物



6号住居址出土遺物



5号住居址出土遺物



6号住居址出土遺物



6号住居址出土遺物



7号住居址出土遺物



7号住居址出土遺物



6号住居址出土遺物



遺構外出土遺物

遺構外出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	はらんじょういせき						
書名	原の城A遺跡						
副書名	官舎建設に先立つ 埋蔵文化財包蔵地原の城A遺跡発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	伊藤尚志						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎ 0265-53-4545						
発行年月日	西暦1996年3月28日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
はらんじょう 原の城A	いいだしわあさとくらだ 飯田市上郷黒田 1052他	2053		35° 31' 23"	137° 50' 19"	平成7年 4月6日 平成8年 3月28日	1,600 m ²	官舎建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
原の城 A	集落址	繩文 弥生	土坑 竪穴住居址	6基 4軒	繩文土器片 弥生土器 弥生石器			

原の城 A 遺跡

1996年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地
飯田市教育委員会
印 刷 有限会社 発光堂
